



大洲城の沿革

○大洲城の概要

大洲城は、肱川中流域に位置する大洲盆地において、肱川と久米川とが合流する付近にある独立丘陵上に築かれた平山城です。丘陵頂部に本丸、北から南の山麓部には細かく区切った二の丸を配し、内堀を隔てて西から南へ三の丸を構える、梯郭式の縄張りを採った城郭です。

中世の頃には宇都宮氏の居城でしたが、天正13(1585)年の羽柴秀吉による四国平定後、伊予国領主となった小早川隆景の伊予国内の城郭整理によって、存城として位置づけられます。その後、城主となった戸田、藤堂、脇坂氏の代において、近世城郭へと徐々に整備されたと考えられています。続く加藤氏が治めた江戸時代には、天守を含めて18の櫓が存在したとされ、本丸から三の丸にいたる全範囲において、数多くの石垣改修や櫓の建替えがおこなわれています。ただし、基本的な城郭のスタイルに大きな変化はありませんでした。

明治2(1869)年以降、政府の管轄となった大洲城は、明治6(1873)年の廃城令を機に、民間への払下げが実施されており、城の全範囲が個人の所有となると、明治21(1888)年には、老朽化を理由に天守が解体されてしまいました。明治39(1906)年になると、本丸と二の丸の一部が、大洲町(現在の大洲市)の所有となり、城山公園として管理・整備されはじめます。平成16(2004)年、解体された天守の復元を契機に、城山公園整備の一環として徐々に城跡整備が進められ、現在に至っています。

○大洲城歴代城主

宇都宮氏	元徳3(1331)年?～天正7(1579)年	戸田勝隆	天正15(1587)年～文禄3(1593)年
大野直之	天正7(1579)年～天正13(1585)年	藤堂高虎	文禄4(1595)年～慶長14(1609)年
小早川隆景	天正13(1585)年～天正15(1587)年	脇坂安治・安元	慶長14(1609)年～元和3(1617)年
		加藤氏	元和3(1617)年～明治2(1869)年

※初代・加藤貞泰～13代・泰秋にわたる。

○大洲城略年表(※ゴシック体は、奥御殿・石垣A-1箇所に関するもの)

天正15(1587)年	戸田勝隆が大洲城へ入城。
文禄4(1595)年	藤堂高虎が所領7万石の領主として大洲城へ入城。
慶長14(1609)年	脇坂安治が5万3,000石の城主として入城。
元和3(1617)年	脇坂安元が信州飯田へ転封。加藤貞泰が6万石の城主として入城。
宝永4(1707)年	宝永地震により、天守台、門などの石垣が多数崩落。
宝永5(1708)年	幕府から石垣修理許可を受ける(※「二丸西方多門下石垣横拾六間高式間半孕申候」)。
寛延2(1749)年	地震により、品川櫓付近の石垣が破損。中の丸御殿(奥御殿)の棟上実施。
寛延3(1750)年	中の丸御殿(奥御殿)へ、御連枝(藩主の親族)が引き移る。
宝暦2(1752)年	富之助(第7代藩主・加藤泰武)が御殿へ引き移る。
安永元(1772)年	江戸の上屋敷類焼のため、中の丸御殿(奥御殿)を解体し、江戸へ移送。
文化8(1811)年	宝永4(1707)年～宝暦4(1754)年の石垣修理箇所をまとめた『大洲城石垣普請図』 ^(※) 作図。
明治2(1869)年	版籍奉還。第13代藩主・加藤泰秋は、大洲城から家老・加藤玄内屋敷跡へ移る。
明治21(1888)年	天守解体。
昭和28(1953)年	大洲城跡の一部が、愛媛県指定史跡になる。
平成16(2004)年	復元天守が竣工する。

※石垣A-1箇所については、このほかにも「二ノ丸西ノ方長屋下二段石垣ヨリ同所続折廻横拾八間高均シ老間五尺孕申候」といった修理計画について記載があるものの、実際に修理が実施されたかは不明である。

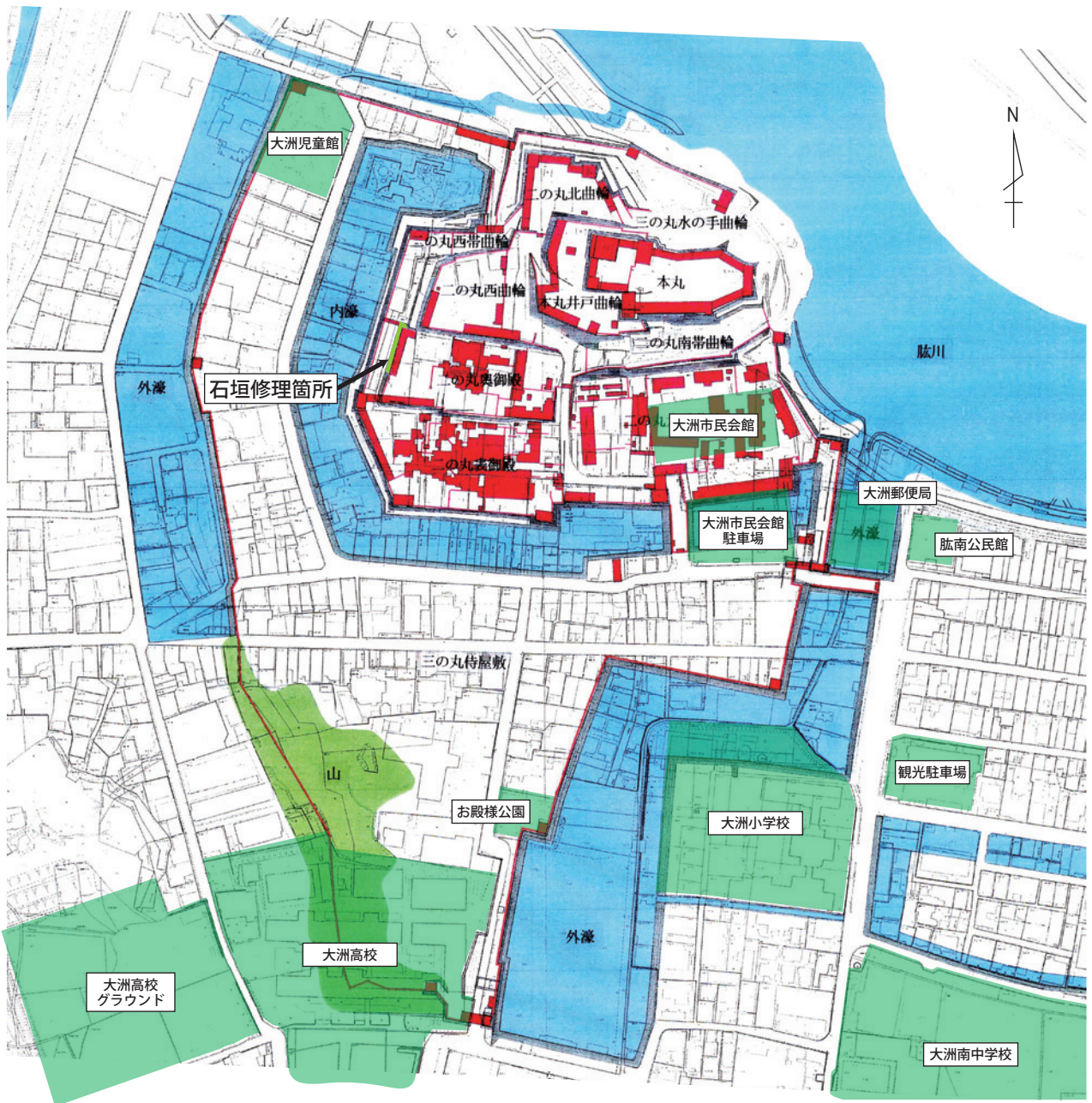


図1 現状市街図に元禄絵図『御城中御屋形並地割図』、『大洲城絵図』を重ねた復元図

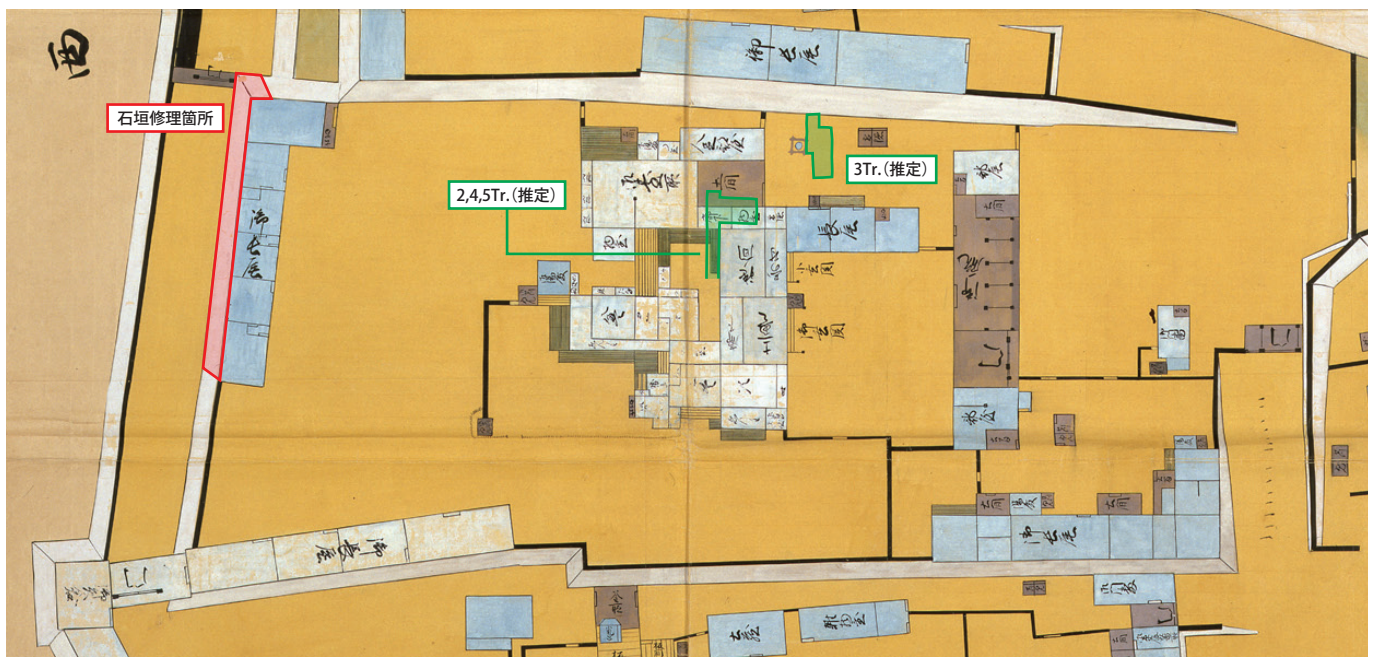


図2 元禄5年『御城中御屋形並地割図』(抜粋)にみる石垣保存修理箇所とトレンチ設定箇所の位置(推定)